

## 母の臨終

去る9月13日の晩、松風寺第4世日祥上人のご内室として、半世紀にわたって松風寺のご弘通を支えてきた母が急逝きゅうせいしました。以下、16日の葬儀を終えてご挨拶させていただいた原稿ぼっすいの抜粋です。

「突然の臨終から3日が過ぎました。まだ、実感が湧きません。と言うか、葬儀の準備に没頭することで、現実を見ないようにしていたのかも知れません。最近、少し疲れているようには見えましたが、母は、特に何かを患わずらっていたわけではありませんでした。臨終の2日前には髪を切ってパーマをかけ、前日の龍口法難記念日の一万遍口唱会の5時間の口唱もやり抜きました。臨終に選んだ日はお祖師さまのご命日で、朝は御修行に参詣し、夕方は本堂の夕看経と庫裡のお看経をご老師といっしょにお参りしました。夕食は、好きなイクラとウニを堪能し、大好きなテレビ番組の「笑点」を見て大笑いし、就寝前に体調の異常きたを来すまで普通の生活をしていたそうです。

私はこのとき、晩の壮年会の御講を終え、月末に使う資料を書斎で作っていました。そこにご老師から電話が入ります。「お母さんが息をしてないみたいや。すぐに来てくれ」と。急いでマンションに行き、脈を診ました。そのまま救急車を呼んで、動かない母に心臓マッサージをしました。救急車はすぐに来ましたが、隊員の方は少し手当てし、「もう病院に行く段階ではないです」と私に告げました。

母は、亡くなる10分前に自分で血圧を計り、血圧の異常な数値をご老師に告げたそうです。薬を飲んで横になった母は、それでも呼吸が荒く、御供水さんを求めて御題目を唱えておりました。しかし、ご老師が母の口元を拭くタオルを洗いに行行って戻ったとき、母は大きく呼吸をし、そのまま動かなくなるとご老師から聞きました。

この3日ほどで、不思議な話をいくつも聞きました。自分の死を覚ったような手紙をもらったという方が、今日の葬儀をお勤めいただいた西村御導師の奥様ほか、数名おられます。ご奉公に迷っていたタイミングで声を掛けられたという人も数名。この3日間、本当は松風寺で佛立修学塾が開催される予定でしたが、コロナの影響で8月末に中止になり、私たちの予定が空いていたのも偶然とは思えません。今日は向かいの大黒屋さんが定休日、駐車場の確保で悩む事務局に、「全部使ってください」と言ってくれたと聞いたときは、少し怖くなりました。長年のご奉公の功德で、皆が励みになるよう、そして皆が困らないよう、最もよい自身の臨終の時を、母は選んだのだと思います。豊かさが長寿社会を実現した一方で、認知症や寝たきりにならず、元気に年を取る難しさを多くの人が感じています。ただ、昔の人はしっかりご奉公が出来ていれば、イケイケバタリで寂光参拝が出来るものだと、自信を持って教えました。臨終の直前までご奉公された開導聖人を目標に、だから日々の信行を怠らず、大切に励むのだ、と。それは昔話ではないことを、はっきりと目に見せた母の臨終は、あまりに見事で、鮮やかであったと思います」

人の一生は臨終の姿に顕れると習います。立派な母の臨終でした。

(『松風寺月報』令和2年10月号)